

マルコによる福音書 4章 35-41節 「不安の先に」

今日の聖書は、突風が起り、湖の上に浮かぶ舟がひっくり返りそうになる、危機に面した場面です。イエスさまは群衆に夢中に話しておられました。日が傾き、一緒に舟に乗っている弟子たちに向かって、「さあ、向こう岸へ行こう」とおっしゃられました。弟子たちの何人かは、ガリラヤ湖で漁師をしていた人たちで、船の舵取りもお手の物です。「舟をこぐのは私たちにお任せください。先生は、ごゆっくりお休みください」という会話もあったかもしれません。しかし、激しい突風が起ったのです。プロの漁師たちが、血相を抱えるほど の突風です。そこで、彼らは、イエスさまに声をかける、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と騒ぎ立てたのでした。

教会にも、自分にも、波が襲いかかります。そんな困難・苦難を前にして、弟子たちが叫んだのです。「わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と。期待だけして、希望通りにいかないときに、私たちは裏切られたように感じます。この時の弟子たちもそうでした。あの日、荒れ狂っていたのは、あの日、激しい突風が吹き荒れたのは、ガリラヤ湖ではなく、本当は、弟子たちの信じる心に大きな波風が吹き荒れました。疑いの波です。けれども、その弟子たちを、「まだ信じられないのか」とおっしゃりつつ、イエスさまは、弟子たちをお見捨てになることなく、進みゆかれました。ずっと一緒に、です。

イエスさまは弟子たちを信頼して、この舟をお任せになられました。任せられたのですから、弟子たちのなすべきことは、必死で舟を漕ぐことでしょう。たとえ嵐が襲っても、「この舟は、イエスさまがおられるから大丈夫」と信じて、心から信じて、必死で舟を漕ぐ、舟の中に水が入って来ても、「この舟は大丈夫」と信じて、その水をバケツか何かを使って、必死でその水をかき出す、心から「大丈夫」と信じて。それが、イエスさまの一番の望み、弟子たちの役割だったのではないかと思います。ただ、イエスさまを信じる。イエスさまも弟子たちを信じる。そのような信頼し合える関係を、イエスさまは望まれていたのでしょう。

私達もそれぞれ信仰生活を送って来て、何度も水浸しになるような、困難を味わってきた方もいることでしょう。でも、舟は沈んでいません。決して順風満帆な旅路ではなかったかもしれません。「ああ、今もだいぶ、舟の中が水浸しになっているな」と思っておられる方もいるかもしれません。でも、大丈夫です。この舟には、イエスさまが乗っておられます。そのことを見失うことこそが、最大の危機となります。信じて進みましょう。

嵐が止まず、どんどん水が入っても、それでも自分たちにできる限りのことを、進める。信じて、です。この世という大海原、そしてそこから迫りくるさまざまな波風は、脅威です。飲み込まれそうな思いになること、しばしばです。でも、その波を、ただ一言で沈める御方がおられます。「黙れ、沈まれ」と。この世のどんな大波も、キリストのただ一言の御言葉にはかなわないのです。わたしたちは、その御言葉に生かされ、歩む恵みにあずかっており ます。人の目は、この世の波の力に惑わされますが、信仰の目をしっかりと開いていただきて、その波も風も沈める、主の命の御言葉、救いの御言葉をしっかりと聴いて、進んで行きましょう。心から、信じて進みましょう。恐れることはありません。主はいつも、あなたと共におられるのですから。